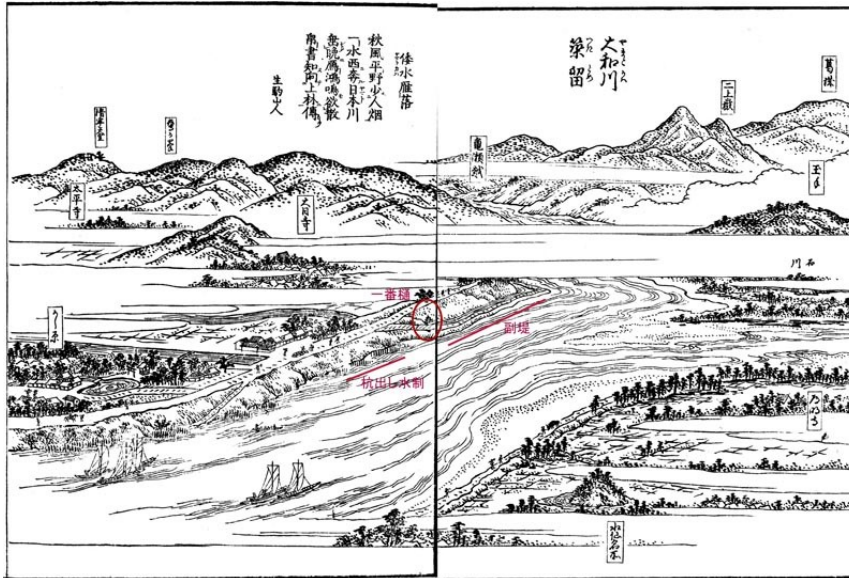


18.河内名所図会を訪ねて その十二 大和川築留



JR 大和路線「柏原駅」東口からすこし歩いたところに、旧大和川の川筋に設けられた長瀬川という水路があります。両岸と川筋がきれいに整備された川沿いを上流に行くと、やがて水路は二つに分かれ、そのどちらからでもさらに上流へ向かうと樋門があり、大きな堤に行きあたります。

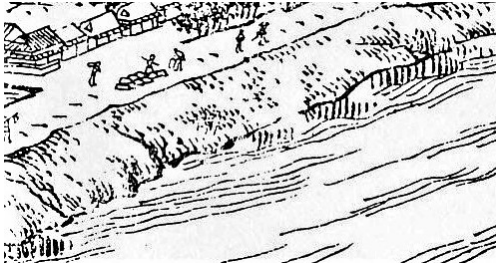
この堤は、今から約 310 年前の宝永元年(1704)北の大阪平野へ流れていた旧大和川をせき止め、西に流れる今の新大和川へと付け替えられた地点で「築留(つきどめ)」とよばれています。現在の柏原市の国道 25 号線安堂交差点付近の治水記念公園から市役所付近になります。

『河内名所図会』は、この付け替え地点や新大和川を河内の名所「大和川築留」として紹介しています。付近の名所や景色、山並みなどがゆったりと描かれていますがよく見ると、大和川の堤防付近は、他と比べてリアルに細かく描写されています。

堤防の保全

築留のある右岸堤防は、対岸の左岸堤防より大きく頑丈に造られ、川側には水当たりを弱くする副堤や工作物を設け、堤を守る工夫をしていることがよくわかります。

新大和川の地形は、左岸が高く右岸が低い傾斜地でしたので、増水時には、右岸堤防への水当たりが強くなりました。そのため、右岸堤防は左岸堤防より大きく築かれました。築留付近は、湾曲した川の流れの水当たりが特に強かったので、川側に副堤を設けて二重堤防にし、本堤を浸食から守りました。



さらに、少し下流の堤防の川岸には、川の中に差し込まれた無数の杭状のものが描かれています。これは、川に杭を並べる「杭だし水制」といわれるもので、堤防にあたる水の流れを弱くする工作物です。

現在では確認することはできませんが、対岸の藤井寺市の小山雨水ポンプ場建設に伴う発掘調査がおこなわれたときに「杭出し水制」の杭列跡が確認されましたので、大和川の随所にこうした「杭だし水制」があったと考えられています。

かんがい用水の確保

旧大和川が埋められると新田開発はできますが、村々の田畑を耕すかんがい用水の供給はできなくなります。そこで、旧大和川の中心部を 5～15 メートルの水路として残し、堤防の下に樋管を伏せ、大和川の水をこの水路に引き出しました。現在の長瀬川、玉串川は、このとき整備された水路です。

絵図の中央部分に本堤と副堤の間から取水する樋が小さく描かれています。この樋は一番樋とよばれ、付け替え時に設置されました。絵図にはこの一番樋だけ描かれていますが、翌年以降、下流に二番樋、三番樋などが次々と設置され、堤防の北側に描かれた 2 本の水路から田畑にかんがい用水として供給されました。

現在も活躍

治水公園の堤の下に一番樋と二番樋があり、少し離れたところに三番樋があります。

現在、一番樋からの取水は行われていませんが、二番樋、三番樋は今も使われています。この樋から八尾、東大阪に流れる長瀬川、玉串川は「大和川分水築留掛かり」とよばれ、300 年以上たった今でも大和川から取り入れた水は水路を流れ、田畑を潤しています。こうした保全活動などが評価され、平成 30 年(2018)「世界かんがい施設遺産」に認定されました。



写真の二番樋は、明治 40 年に改修され「明治の近代河川景観を伝える貴重な構造物」として国の有形文化財に登録されています。

『河内名所図会』の「大和川築留」は、現在も機能しており、当時の堤防の構造や保全を知るうえでも貴重な資料であるといえます。

(2021.5 勝部)

(参照)

秋山藩島編、丹羽桃溪画、堀口康生校訂「河内名所圖會」(1975 年)

中九兵衛「甚兵衛と大和川」(2004 年)

柏原市立歴史資料館「長瀬川と玉串川」(2021 年)

八尾市立歴史民俗資料館「大和川付け替えと八尾」(2004 年)